



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1

ミサの時間：月曜日-土曜日 6:20am (「朝の祈り」に続いて)
日曜日 7:00am、8:30am、9:30am



日本二十六聖人

主任司祭 小西 広志 神父

二月五日は日本二十六聖人の祝日です。教会はこの日本の、そして極東での最初の殉教者を記念します。簡単ですが、学んでみましょう。信仰の先輩たちの生き方を知ることは、わたしたちの信仰を生きる上で助けとなります。

事件の発端と経過は複雑です。一五九六年、秀吉が伴天連追放令を發布してからおよそ十年後、土佐沖でスペインの船、サン・フェリペ号が座礁しました。そこに積まれていた積み荷を、秀吉は没収してしまいました。この積み荷をめぐって、フランシスコ会が猛烈に秀吉に抗議しました。というのも、それより三年前、フランシスコ会士で日本宣教の責任者であったスペイン人、ペトロ・バプチスタは、南蛮貿易の発展に前向きであった秀吉と通商条約を結んでいたからです。その見返りに当時、ほとんどイエズス会が独占で宣教していた日本において、宣教の許可と、京都での修道院の設立を許可されたのです。サン・フェリペ号の積み荷を没収した秀吉に、約束違反だとくってかかるフランシスコ会に対して秀吉は激怒し、見せしめとして十二月八日、京都、大阪方面にいるフランシスコ会、イエズス会の司祭、修道者、ならびに教会の一般信徒二十四名を捕らえ、死刑を命じました。

捕らえられた二十四名は翌一五九七年一月三日、見せしめのため、耳と鼻を削ぎ落とされ、牛が引く荷車に乗せられ、京の都の目抜き通りを引き回しにされました。それから、淀川を下って、大阪でも引き回され、当時の国際商業都市であった堺でも引き回しにされました。それは、秀吉に逆らってキリスト教を信じると、こんな目に遭うという人々への脅しでした。

一月八日、秀吉はこの二十四人を長崎で処刑することに決めました。そこからまた長崎までの厳しく、辛い旅が始まりました。彼らは、ほとんどを歩いて長崎まで進みました。冬の凍てつく寒さが追い打ちをかける辛い旅でした。削がれた耳と鼻からは血が止まりません。旅の途中で二人の信者が仲間に加わりました。この二人はもともと、二十四人を世話するために一緒に旅をしていたのですが、彼らの信仰に心打たれて、仲間に加わったのです。

二十六人の内訳は多種多様でした。司祭、修道士、教会で伝道師をしていた者、信徒などでした。職業もバラバラでした。医者、桶屋、大工。出身地も様々でした。日本、スペイン、ポルトガル、インド、メキシコ、それに中国。最近の研究ではレオン烏丸、パウロ茨木とルドビコ茨木は韓国人であったと言われていません。また年齢も様々でした。最年少のルドビコ茨木は十二歳でした。トマス小崎は十四歳、ディエゴ喜斎は六十四歳でした。このように出身も、年齢も、仕事も違う人々が、キリストへの信仰の証として一つに集められ長崎への旅を続けたのでした。特に年少のルドビコ茨木とトマス小崎は、信仰を棄てることを役人からしきりに勧められました。信仰を棄てたら養子として迎えてやると、役人らは言ったのです。しかし少年らは、頑としてその申し出を突っぱねました。トマス小崎が長崎へ向かう途中、安芸国、三原城で母親に宛てて書いた手紙が現存しています。ご存じの方も多いことでしょう。

九州に上陸し、彼らは後から追いかけてきたイエズス会の司祭に罪の告白をし、ゆるしの秘跡を受けました。そして二月五日、長崎の西坂の丘で十字架に縛り付けられ、槍で突かれて殉教しました。最初にメキシコ人フィリポ・デ・ヘスが殺され、若いルドビコとアントニオは聖歌を歌いながら槍で突かれていったそうです。そして最後に、二十六聖人のリーダー格だったペトロ・バプチスタが殺されました。

日本の聖なる殉教者たちよ、信仰の弱いわたしたちをお守りください。